

32 HILL WIND

MIE
PREFECTURAL
ART MUSEUM
NEWS

去る9月25日、三重県立美術館は30回目の誕生日を迎えました。「30歳になった感想は？」と美術館に聞いてみたら、こんな返事があるかもしれません。「ようやく30歳、でもまだ30歳。」と。コレクションも増え、展覧会の数も重ね、たくさんの方に親しまれて少しずつ成長してきました。30回目の誕生日、おめでとう。さあ、これからはどんな顔を見せてくれるのでしょうか。(Hm)

展覧会スケジュール

■企画展示

平 櫛 田 中 展

2012年10月30日[火]ー12月9日[日]

観覧料：一 般 900(700)円

高大生 700(500)円

小中生 400(300)円

()内は前売りおよび20名以上の団体料金

●ギャラリートーク

日時：11月10日[土]、12月1日[土]

いずれも午後2時から

参加無料、ただし展覧会観覧券が必要です。

コレクションの全貌展

PART1:2013年1月4日[金]ー2月11日[月・祝]

PART2:2013年2月14日[木]ー3月24日[日]

観覧料：一 般 500(400)円

高大生 400(300)円

小中生 無料

()内は20名以上の団体料金

■常設展示

美術館のコレクション

【第Ⅲ期】2012年10月2日[火]ー12月24日[月・祝]

【第Ⅳ期】2012年1月4日[金]ー3月31日[日]

柳原義達記念館 柳原義達の芸術

【第Ⅲ期】2012年10月2日[火]ー12月24日[月・祝]

【第Ⅳ期】2012年1月4日[金]ー3月31日[日]

■メールマガジン 購読料無料

三重県立美術館の最新情報をみなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。詳しくは、美術館ホームページをご覧ください。

利用のご案内

■開館時間

午前9時30分ー午後5時(入館は午後4時30分まで)

■休館日

月曜日(祝日休日にあたる場合は開館、翌日閉館)

2013年1月15日(火)、2月12日(火)

年末年始[2012年12月25日(火)から2013年1月3日(木)]

■観覧料

【常設展示の場合】

〈美術館のコレクション+柳原義達記念館〉

一 般 300(240)円

高大生 200(160)円

65歳以上の方、小・中生 無料 ()内は20人以上の団体料金

【企画展示の場合】

その都度定めます。

ただし、学校の教育活動として県内の小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、身体障害者手帳等をお持ちの方および付き添いの方1名が観覧する場合は無料。

■交 通

津駅(近鉄・JR線)西口より徒歩約10分または、循環津駅西口(つつしが丘、むつみが丘経由)行き、総合文化センター行き2分、美術館前下車 ※できる限り公共交通機関をご利用ください。



三重県立美術館 〒514-0007 津市大谷町11

Tel:059-227-2100 Fax:059-223-0570 <http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/>

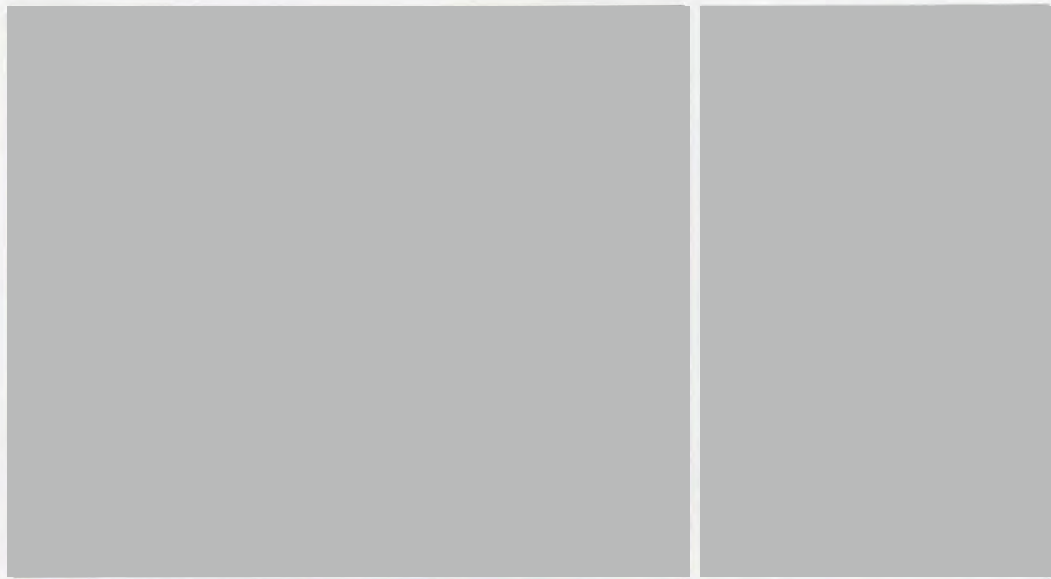
三重県立美術館ニュース「HILL WIND」No.32

■発行日:2012年10月26日(禁・無断転載) ■企画・編集・発行:三重県立美術館

■原稿末尾のイニシャルについては以下のとおり: 鈴木麻里子(Sm)、田中善明(Ty)、原舞子(Hm)、毛利伊知郎(Mi)、吉田映子(Ye)

■表紙の作品:平櫛田中《鳥有先生》(部分) 1941年 東京藝術大学蔵 ■アザイン: 豊永政史





平櫛田中展

2012年10/30|火| - 12/9|日|

明治以降の美術界を見ますと、若くしてこの世を去った作家が少なくないことに気づきます。彫刻家も例外ではありません。荻原礫山(守衛)、中原悌二郎、戸張孤雁、橋本平八ら早逝した作家たちの名を挙げることは難しくありません。医療が今日ほど整備されていなかった戦前、経済的に恵まれない作家が多かったことを考慮すると、それは当然のことかもしれません。

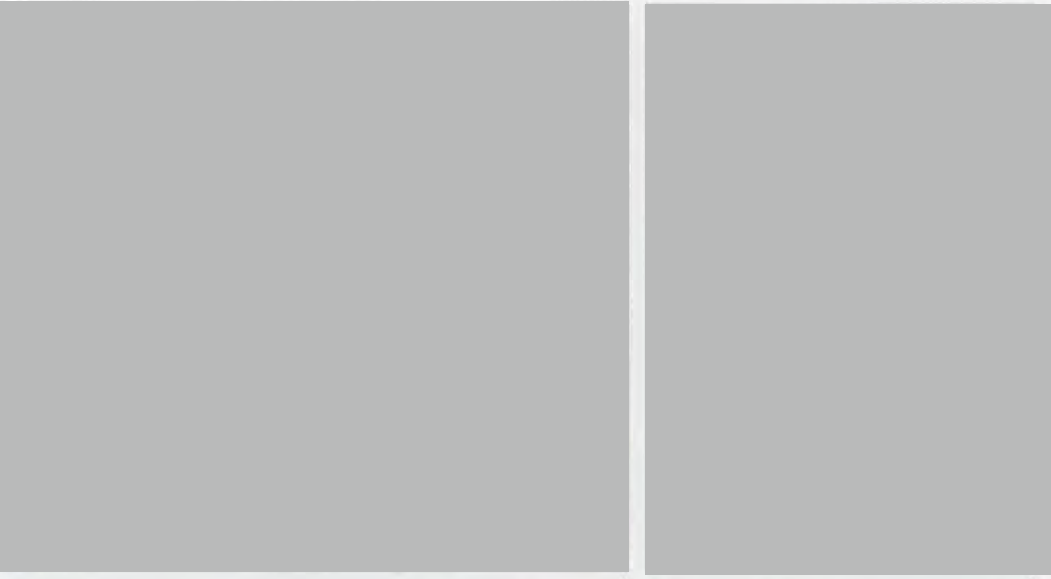
明治初期に西洋彫刻がわが国へ本格的に伝えられてから、日本の彫刻は西洋の世界と日本の伝統的世界との間を往き来しながら展開してきました。しかし、才能を持ちながらも志半ばで倒れる作家が相次いだことで、日本の近代彫刻は不完全燃焼を余儀なくされた側面を持っていると思います。

そうした中、明治後期に本格的な活動を始めた平櫛田中が、満107歳という長寿を保って長期間制作を行ったことは稀有なことでした。この平櫛の70年を越える活動をたどることは、日本近代彫刻の一つの展開を検証することでもあるといえるでしょう。

今回の展覧会は、平櫛が彫刻を習い始めるまでに彫ったと伝えられる小品《鬼小像》から、100歳を越えてから制作された《彫馬》(1973年)まで代表的な彫刻76点で構成されます。これまであまり紹介されることがない平櫛彫刻の石膏原型も展示されます。石膏原型を展示することになったのは、平櫛の木彫の多くが塑造の形状を木材へ正確にうつして彫られている事実を重視した結果です。

展覧会は、平櫛田中の活動にとって重要と考えられる諸要素に着目して構成されます。中でも、西洋彫刻に対する平櫛の姿勢、江戸時代以前の造形世界との関係、禅の思想と平櫛との関係などは重要なテーマではないかと思われます。これらの問題は、平櫛だけではなく、日本の他の彫刻家たちも等閑視できないテーマだったはずです。

長期にわたって彫刻に取り組んだ平櫛田中の作品を今見ることとは、過去の歴史を回顧することにとどまりません。現在、さらには将来の日本彫刻の在り方に思いをめぐらす上でも少なからぬ意味を持っているのではないかと思います。(M1)



1. 《無矣無矣》1907年 大分県立芸術会館蔵
2. 《幼児狗張子》1911年 井原市立田中美術館蔵
3. 《裸婦》1916年 東京藝術大学蔵
4. 《試作鏡獅子》1939年 井原市立田中美術館蔵
5. 《試作鏡獅子》1939年頃 小平市平櫛田中彫刻美術館蔵





小川詮雄《二人の女》1913年

今から約10年前のこと、柳原義達記念館増築にあわせて当館の収蔵庫が350平米ほど増床されました。当時、コレクションが増えたことよって収納スペースが手狭になり、展示替え作業の度ごとにあれこれと周囲の作品を移動させ、それでも収納すべき場所が作品がおさまらなくなっていました。念願の増床が叶い、これでしばらくひと安心と思いきや、それから月日がたち、今また同じ現象が起こりつつあります。再び収納には工夫が必要となったものの、これは喜ばしい現象でもあります。何故なら、江戸時代以降の三重県にゆかりのある作品を中心に、30数年集められた作品が、まだ歴史的な展開を伝えるための質と量を十分には備えているとは言えませんが、ようやく点が線になり多様な美術の世界を紹介するだけの素材が揃ってきたからです。それはとりもなおさず、当館独自の収集だけでなく、岡田文化財団をはじめ企業や個人の方々からの作品寄贈があったからこそです。

こうしたコレクションを、開館30周年を記念して企画展示室と常設展示室にて2期に分け、可能な限り多くの作品を紹介してまいります。普段あまりご紹介できなかった作品や資料類を展示するほか、柳原義達記念館では今年度寄贈を受けた伊賀市出身で国際のにも活躍された元永定正氏の作品を一堂に展示します。

この全貌展にあわせて現在準備中なのが所蔵作品のデジタル画像を感覚的操作で自由に閲覧できるシステムで、展示されない作品も含めて高精細の画像でご覧いただけます。さらに県内の学校の先生など有志による美術鑑賞教育研究会（JAMM研究会）とともに新しい鑑賞用ワークシートを20種類作成中です。作品鑑賞ツールとしてだけでなく、持ち帰ったあとにも楽しんでいただける工夫を凝らしています。そのほか、当館の美術館ニュース「HILL WIND（ひる・ういんど）」のバックナンバー配布や図録等の特別販売、映画会なども予定しています。（T）

書庫にて(28日午前)



7月28日、子ども美術館展の関連企画として「美術館のうらがわたんけん」を行いました。展覧会の開幕ほどなくして行われたこのツアーでは、午前午後合わせて23名の小学生がいくつもの秘密の扉を通ってバックヤードの探検に挑みました。美術館の心臓部とも言えるべき収蔵庫の入口に設けられた頑丈な金庫扉は、やはり見る人の目を圧倒するもの。なぜこのような頑丈なつくりになっているか、という疑問は部屋のなかの宝物（コレクション）がいかにか貴重かということに自ずと説得力を与えます。セキュリティの話は子どもたちの興味をそそるようで、スタッフの話に真剣に聞き入る姿が印象的でした。

「うらがわたんけん」開催日は、ちょうど展示室の一部が閉室中であつたため、作品の飾られていない展示室内まで足を伸ばすことができませんでした。何も無いところから、作品が展示された状態を想像するのは難しいらしく、「作品はどうやって展示しているでしょう？」の問いかけには皆そろって首をかしげていました。

暗い展示室を抜けて最後の扉を開けると、明るい光の射す休憩ロビーへと出たことには参加者一同驚いた様子。ここで「そうか!」と頭のなかの地図が繋がった人がいたとしたら大したものですよ。

今回の探検に際して企画の段階より自分の頭から離れなかつたのは、美術館経験が決して豊富とは言えない小学生に「おもてがわ」を見せずして「うらがわ」を見せることはどの程度意義深いものにできるかという小さな疑問です。「バックヤードツアー」は今日さまざまな施設で行われています。確かに「おもてがわ」を見慣れている人間であれば、普段は覗けない「うらがわ」を見たときに新鮮な感動があるはずですが、そうでなければ「うらがわ」にあるものの意味はすんなりとは理解しがたいのかもしれない。「おもてがわ」あつてこそその「うらがわ」。そしてまた逆も然り。今回のツアーでは「おもてがわ」にはほんの少ししか進出できませんでしたが、参加してくれた小学生たちがいつの日か「おもてがわ」で「あの時見たものにはそういう意味があったのか」と納得してくれたら本望です。（Sm）



収蔵庫前にて(28日午後)

今年4月、三重県立美術館にやってきました、吉田映子です。生まれ育った愛知県から小旅行気分を訪れていた場所に、今は、徒歩か自転車で通っています。

大学では、ピエール・ボナール（1867-1947）を研究していました。この画家は、「ナビ派」としての初期の活動や、晩年の「浴槽の裸婦」といった画題がよく知られています。そんななか、パノラミクな構図や鮮やかな色使い、息詰まるほど多様なマチエールが魅力の、風景画にとりわけ興味を惹かれました。

2009年の秋、数多く描かれた下絵素描や、完成作の図版を片手に、終の棲家となった南仏ル・カネの丘を歩いてみました。リゾート地の強い日差しの下では車での移動が基本です。「怪しい東洋人」を自覚しながらも、舗装のない山沿いの道へと足を踏み入れると、晩年の作品に登場する小屋が今も残されていました。画家のお決まりの散歩ルートであったこの道は、カンヌの街をU字に囲む山々の中腹にあり、画家の家「ル・ボスケ」があった東側から北のほうへとカーブを描いています。ボナールの風景画には、この道が途切れるところより西側からの視点がほとんど確認できません。こうして足取りを辿ることで、画家が、カンヌの街と湾の風景を、自らの足の届く限りで、様々な角度から描いていたことがわかります。自然を、崇高さや荘厳さではなく、調和と親しみの対象として描く。身近なモチーフを描いて「親密派」と呼ばれたボナール芸術の特徴は、風景画にも表れています。



1

当館の学芸員となって早や半年以上が過ぎました。その間、最も戸惑ったことは、展示作業や作品調査を日常的に経験するなかで、美術作品がこれまでとは異なった存在感をあらわしたことです。研究においても、技法やサイズは当然意識すべきものですが、実際に展示するとなると、それらの情報がときに抵抗や制約として、具体的に立ち現われてきます。先輩学芸員は、「モノ」のそうした特徴をよく理解した上で、展示室で再び「作品」として輝かせます。一日も早くその技術と知識を身に付けて、多くの作品の魅力を皆さんにお届けしていきたいと思えます。(Ye)



2

1 画家の散歩道には晩年の風景画に描かれた小屋が今も残る。

2・3 ル・カネの丘からカンヌの街と湾を望む。

4 建設中だったボナール美術館（2011年7月より開館）



3



4

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会など、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

■年会費

一般会員：3,000円 入会金：500円

ペア会員：5,000円 入会金：1,000円

■特典

会員鑑賞券配付、観覧料半額、美術館に関する情報提供のほか、レストラン、ミュージアムショップのご利用にも割引があります。詳細は、三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館協会の賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布、鑑賞団体への援助など、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。協会の主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

■会費

年間一口

個人：25,000円 法人：50,000円

準会員：10,000円

■特典

展示会ならびにレセプションへの招待、各展示会毎のカタログ贈呈や美術館活動に関する情報提供などの特典があります。詳細は三重県立美術館協会事務局(TEL 059-227-2232)までお問い合わせください。

三重県立美術館ニュース

32 HILLWIND